
無関心

玖楼

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無関心

【Nコード】

N7916M

【作者名】

玖楼

【あらすじ】

雑記。思いつき。徒然。

私は確かに、どこか冷めているのかもしれない。

大学に入ってから4カ月が経ったころ、友達と歩いている道中、がりがりにやせ細った猫を見つけた時があった。おそらく野良猫であろう。人慣れしている雰囲気ではなかったが、蒸し暑い天候と飢えでだいぶ弱っていたのか、私たちが近づいてもたいした威嚇もしなかった。私たちはその猫をどうにかしてやりたいと、近くにあった紙コップにたぶたぶに水を入れてやり、そこから十数メートル行つたところにあるコンビニで100円の猫缶を買ってやってやった。猫に勝手な名前も付け、私としては、（近所の住民の邪魔にならない程度に）これからその猫の世話をしやりたいと思っていた。そこには同情や偽善の類のものは一切になく、ただその猫の孤独で気高い雰囲気魅せられただけなのであった。しかし、その次の日からその猫は姿を見せなくなった。ただそれっきりの体験となった。

話を戻すと、その時一緒にいた友人によると、私は人間と接するときよりも遥かに優しくあの猫に接していたらしい。思い当たる節はある。あの猫を夜中に見舞い、首を撫でてやっていた時に感じた安らぎやいとおしさは、人間に対しては久しく抱けなかったものだった。あの瞬間、猫は私にとっては猫でなく、仲良くなりた対象であつた。人間に抱くものとまるで同じ種類のものだった。

また、私は自分でもふと気がつくとても冷静に自分も他人も見ている時がある。友人たちと馬鹿みたいに騒ぎ、阿呆みたいに笑うときも、急に1人になりたくなって（というよりも、脳から「危険信号」のようなものが送られて、1人にならなくてはいけない気に

なる。まるで、医者から渡された薬を時間通りに飲むべきであるのと同じように。トイレだとか、ジュースを買ってくるだとか適当に理由をつけてその場から抜けるのだ。そしてさっきまでの自分とは別人のように落ち着き、クールに歩きだす。一気に客観的になり冷静さを取り戻し、そしてそれは心にとっての休息なのである。

私は、私は、おそらく怖いのだろう。足が地についていない状態が。人間といると、いつも悲しくなる。もちろん、その何倍もの嬉しさや幸せも与えられる。だが、ほんの一抹の悲しみが、私は厭で厭で仕方なく、きつとなによりも怖いのだろう。私にとっても、所詮猫は猫なのだ。猫には期待をしないから、いなくなってもいいやと思う。でも人には期待をしてしまうから、それがいけないのだ。そして、自分を一瞬でも見失うことにこの上ない不安を感じるのだ。自分の管理下にない自分を、自分が見たくないのだ。一瞬たりとも解放してはいけない、したくない、本当の自分。大袈裟な表現ではあるが、嘘ではない。

それが、私の全ての根本なのではないか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7916m/>

無関心

2010年10月20日18時54分発行